よ」という意の滅罪息災の真言である。

第三面にも梵字の墨痕がみられるが、ほとんど消えており内容は不明で、わずかに「ソワカ」の二字が下部に残るだけである。「ソワカ」は多くの真言の文末に用いる語句で、成就を祈るという意味である。但し、第二面からの続きなのか、第三面上部からの続きなのかは不明である。もし第二面の文末に直接続くものでないとすれば、その位置から第三面には五～一五字程度の梵字が記されていたと考えられる。

以上の梵字はいずれも葬送に関わるものである。六地蔵菩薩は墓地の入口に立ち死者を迎え導く存在であり、随求小呪も墓地の入口の造立物や供養碑にみられるものである。要するに、六地蔵菩薩および随求菩薩の功徳により、六道（天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄）に迷わず、諸々の苦難を免れ無限の罪を解くという意味合いをもつもので、SK〇九の被葬者の極楽往生を願い桶脇に差し込まれたのであろう。

9　関係文献

㈶元興寺文化財研究所『三堂遺跡発掘調査報告』（一九九七年）

（岡本広義）

木簡学会編『日本古代木簡選』の復刊

木簡学会が創立一〇周年を記念して一九九〇年に刊行した『日本古代木簡選』が復刊された。これは一九八七年度まで（一部一九八八年度を含む）に全国で出土（伝世品を含む）した古代の木簡のうち、六六遺跡の五三二点の木簡について、遺跡ごとに釈文と解説を収録し、写真を掲載したものである。

解説の執筆は、石上英一・今泉隆雄・加藤優・鬼頭清明・倉住靖彦・栄原永遠男・佐藤宗諄・杉本一樹・東野治之・平川南・山中敏史・和田萃の各氏の分担による。また、木簡総論として、狩野久「古代木簡概説」、平野邦雄「木簡と古代史学」、田中琢「木簡と考古学」、佐藤信「木簡研究の歩みと課題」を収める。木簡研究の到達点として、また今後の研究の原点として、常に参照されるべき内容となっている。

なお、復刊にあたって誤植の他、左記の図版の誤りを正した。少部数の復刊であり、お求めはお早めに。

166
369
495……表裏のレイアウトの誤りを訂正

267……裏面にレイアウトしていた別の木簡を削除

B四版　巻頭カラー図版二頁、モノクロ図版八五頁、解説ほか一六六頁　岩波書店刊　定価一八〇〇円（税別）